

11月は児童虐待防止推進月間

社会の宝であり、次代を担う大切な子どもたち。守られる存在でありながらも、児童虐待によって心が傷ついた子どもたちは増え続けています。

11月は児童虐待防止推進月間です。子どもが育つ環境に、地域のどんな支えが大切なのか、みんなで考えてみましょう。

気づいたら支えて知らせて見守って

育てる大人、育つ子どもを取り巻く困難がある

近年、児童虐待の痛ましい事件の報道が後を絶ちません。出雲市においても、関連する相談や通告の件数は年々増えています。

一般的に児童虐待というと、親からひどい体罰や暴言、あるいはネグレクト（育児放棄・怠慢）などを受けている幼い子どもを思い浮かべられるかもしれませんが、小中学生の事例も多いのが現状です。

これらの背景には、育児上の困難要因が多く絡み合っています。親の側の要因としては、経済的困窮、育児の支援者がいないこと、親自身の心の不調などがあります。

子どもの側の要因としては、発達障害などによる「育てにくさ」があり、親が愛情をもてなくなってしまう場合があります。

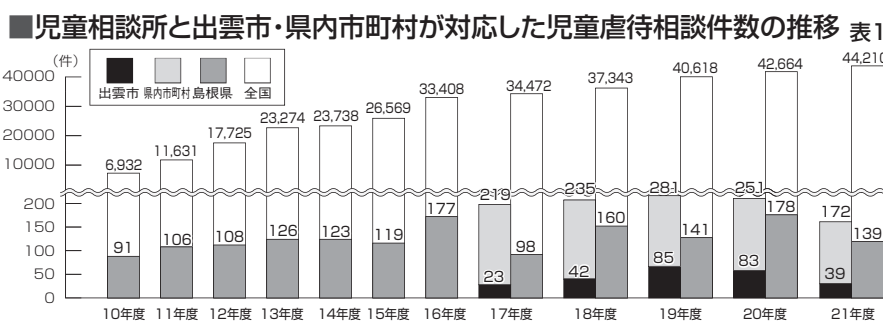
学齢期の子どもにおいては、非行行為や学校での不適応、逸脱行為がみられることがあります。その背景として、虐待を受けた経験を持っている場合があります。

周囲の大人の気づきが大切

これらの子どもたちの多くに共通していることは、虐待行為や類似の行為を受けていても、自らが助けを求めることはごく少ないということです。そのため児童虐待を予防したり、早期対応するためには、周囲の大人の気づきが重要となってきます。また、子どもだけでなく困難を抱えて悩む親へも支援が必要です。

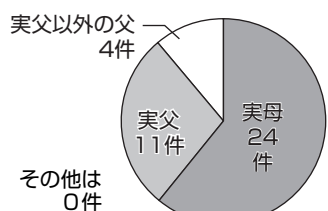
身近な地域で、「気づいたら支えて 知らせて 見守って」を合言葉に、子どもたちや子育て家庭を支えるまちづくりに市全体で今後一層取り組んでいきたいと思います。

平成21年度 児童虐待の現状



※17年度から出雲市に虐待相談窓口を設置

■主な虐待者(出雲市) 表2



(注)

- ①児童福祉法改正により、平成17年4月から市町村において、児童家庭相談窓口を設置している。そのため、県内市町村対応件数は、平成17年度から数字を計上。
- ②県内市町村が対応した件数と、島根県が対応した件数には重複あり。(重複件数/平成18年度80件、平成19年度63件、平成20年度110件、平成21年度60件)

市の児童相談窓口は
子育て支援課 ☎ 6604

オレンジリボンには、子どもの虐待を防止するというメッセージがこめられています。



ひとりぼっちの

私が

市長になった！

茨城県高萩市長

草間氏講演

高萩市長の草間吉夫氏は、親と暮らせない環境で18歳まで育った経歴の中で政治を志し、市長に就任されました。

草間氏の、人生を開拓する精神を育み支えたものは何か。子どもが育つ地域への思いがあふれた講演を紹介します。



7月に出雲市を訪れ、出雲市要保護児童対策地域協議会の研修会で講演する草間市長（ビッグハート出雲）

児童養護施設で育った生い立ち

私は、生まれてすぐ乳児院に預けられ、18歳まで児童養護施設で育ちました。全国では約3万人の子どもたちが「児童養護施設」で、2歳未満の乳幼児の約5千人が「乳児院」で暮らしています。その中で、私のように親がいないケースはわずか。大半が、児童虐待などで心が傷ついた子どもたちです。

私は、施設で、自分の生い立ちを知らないまま成長しました。施設で育った子が、自分の境遇を知るタイミングは、とても大きな課題です。子どもが不安定になるからです。

私が母のことを知ったのは、大学に入ってからでした。私を産んですぐ精神疾患で入院をし、その後ずっと病院で過ごしていたようです。その事実を知ったとき、大きなショックを受けたことを記憶しています。

子どもの心が求める親の愛と家庭の温もり

施設では、ほとんどの子は、正

月やお盆には、家に帰りますが、親のいない私にはいつになっても迎えがきませんでした。お盆に朝からずっと外で、来るはずのない親の迎えを待っていた小学生時代のことを思い出すと、今でも辛いものがあります。

血のつながらない縁に恵まれた青少年時代

中学生時代は、一番思い出したくない期間です。

休みの日に友だちに誘われても、施設は午後からでないと外出できません。朝から遊びに行ける一般家庭の子と同じ行動はできず、やがて「お前は学園だもん」と、誘われなくなる。そんな辛さを味わいました。

また、中学校には施設から10数人通っていましたが、お弁当が、みんな同じ。弁当箱の8割はご飯で、おかずは「ポウやじゃが芋など茶系です。友だちの弁当は、色とりどりで美しく、ご飯とおかずが半々。これを黄金の比率とよび憧れたものです。心を痛めた日々

でした。

中学時代は、悪いこともしましたが、有難いことに「血の繋がらない縁」に恵まれて、非行に走る前に早い段階で引き戻され、高校、福祉系の大学へと進学しました。学費は奨学金とアルバイト、不足分は施設の園長先生に出してもらいました。

大事な人との出会いと政治への志

僧侶でもある園長先生のもとには、大学時代一ヶ月半に一回の割合で通い、「その人らしく生きられる支援、自宅のような環境でケアをするのが本当の人間の尊厳に根付いた福祉」というような数々の理念を教わりました。この尊敬できる先生との交流で、自分の人生を呪う気持ちが少しずつ薄らいでいったのでした。

その後、児童養護施設の職につき、施設の職員として子どもたちと接することになりました。そこで痛感したのは、施設への社会的偏見や誤解、就職や結婚への大きなハンディでした。事実、私も結婚にあたっては、妻の親戚からの反対にあいました。それを変える

ためには政治しかないと思い、松下政経塾の門を叩く決心をしたのです。入塾の倍率は70倍でしたが、明るく素直で、面白そうな人物だからと入塾が許されました。

それから5年間、子どもの権利が大きく補償されているカナダなど、多くの国を訪れて学び、今は市長として、市政に取り組んでいます。

子どもへの投資は社会への投資

私がいた施設の園長先生は、私の向学のために出してくださったお金を、「俺に返さなくていい。社会へ返しなさい」と言ってくれました。私は、次代を担う子どもたちへの投資は、しっかりとすべきであると思っています。社会に支えられて育った子どもたちは、将来は社会へ貢献してくれるからです。

今私は市長ですが、これからの人生、まだまだ、やりたいことがあります。最終的には、児童養護の世界に戻り、子どもたちのために、私だからこそできる何かをしたいと考えています。志を持って、これからもしっかり生きていくつもりです。